

古事記に現れる土神

誌名	日本土壌肥料学雑誌 = Journal of the science of soil and manure, Japan
ISSN	00290610
著者名	奈良,吉主 陽,捷行
発行元	日本土壌肥料学会
巻/号	91巻2号
掲載ページ	p. 90-93
発行年月	2020年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



古事記に現れる土神

奈良吉主・陽 捷行

1. はじめに

万葉集、風土記および古事記は、それぞれ日本最古の和歌集、地誌および歴史書である。

万葉集は、4世紀から8世紀後半の歌を7世紀後半から8世紀後半にかけて編んだもので、天皇・貴族から下級官人・防人・詠み人不明などさまざまな身分の人の歌4,516首が、二十巻にまとめられている。この和歌集は、天平宝字3年(759年)以後に成立したとみられる。その内容は、表意文字と表音文字(万葉仮名)とが混在した日本史のうえで価値ある作品である。雄略天皇の御製歌にはじまり、大伴家持の宴の歌でおわる万葉集には挽歌・相聞歌・譬喩歌・雑歌などが含まれる。

それらの歌には方言による歌もいくつか収録されており、なかには詠み人の出身地も記録されていることから、方言学の資料としても非常に重要なものとして重宝されている。加えて、さまざまな動物および植物が登場し、当時の生き物と人間の文化誌を想起することができる。万葉びとは、これらの生命の起源である土壌を五感や五体にどのように感受・記憶し、どのように歌として記録してきたのであろうか。その疑問を「万葉集に詠われた土壌—『あおによし』『はに』『にふ』などの由来と意味—」と題した報文で解析した(陽, 2017)。

風土記とは、一般には地方の伝説・風俗・歴史・文物などを記した地誌のことをさす。しかし、ここでは奈良時代の和銅6年(713年)、律令国家の命により地方の文化・風土・地勢などを国ごとに記録編纂し、天皇に献上させた報告書に限定する。文体は、漢文体や変体漢文体など国により異なる。現存する風土記は、完本である出雲国と省略欠損のある常陸・播磨・豊後・肥前国の五か国である。ほかに、逸文が30数か国分「続日本紀」や「万葉集註釈」などに収められている。

続日本紀の和銅6年(713年)の条には、詔勅によ

り「土地の地味肥瘦の状態を報告すること」とある(上田, 1975)。そこで、播磨国風土記を中心に上記五か国について、当時の「土地の地味肥瘦の状態」の内容や土壌に関する記述を調べた。その結果を、「風土記が語る『地味肥瘦』と現在の土壌分類との対比—播磨国を中心に—」と題して報告した(陽, 2019)。

古事記は、40代天武天皇の勅命によって編纂がはじまったわが国における最古の歴史書である。稗田安礼が、天皇の系譜・事績と神話などを記した帝紀・旧辞などの書物を誦習し、それを太安万侶が四か月かけて編纂し、43代元明天皇の和銅5年(712年)に完成し、天皇に献上された歴史書である。上・中・下の全三巻に分かれるが、原本は存在しない(竹田, 2011)。古事記の全三巻のうち、上巻は神の代の物語、中巻は神と天皇の代の物語、下巻は天皇の代の物語で構成され、33代推古天皇で終わっている。

古事記は、神話であり聖典であるとともに、天皇の命により国家が編纂した公的な歴史書である。江戸時代の本居宣長は、古事記は古代日本人の心情が現れた最上の書として評価している。古代の日本人は、大地や土壌をどのように評価して、それを後世にどのように継承しようとしたのであろうか。

ここでは、神の代に生まれた大地や土壌にかかわる神々を古事記から明らかにし、その神々が現在どのような姿で現れているかを明らかにし、この国の人びとが大地や土壌をどのように尊敬してきたかを提示したい。

なお、古事記(712年)と日本書紀(720年)は併せて記紀といわれ、いずれも天武天皇の命を受けて編纂された歴史書である。古事記は国内向けの表音文字で書かれ、三巻のうち一巻を神の代に費やしていること、日本書紀は対外的に漢文で書かれ、三十巻のうち神の代に二巻しか費やしていないことなどを理由に、ここでは古事記に現れる土神について解説した。しかし、ときとして古事記の神々を詳解するため日本書紀の土神も登場してもらうことがある。

2. 古事記に現れる土に関する神々

1) 神世七代のうちの三代: 宇比地邇神(うひぢにのかみ)・須比智邇神(すひぢにのかみ)

宇比地邇神と須比智邇神は、伊耶那岐神(いざなぎのかみ)・伊耶那美神(いざなみのかみ)と同じ神世七代の第三

Yoshiyuki NARA and Katsuyuki MINAMI: The gods of soil found in KOJIKI: Records of ancient matters in Japan
公益財団法人農業・環境・健康研究所(410-2311 静岡県伊豆の国市浮橋1601-1)

Corresponding Author: 奈良吉主 y-nara@moa-inter.or.jp
2020年1月17日受付・2020年1月27日受理
日本土壌肥料学雑誌 第91巻 第2号 p. 90~93 (2020)

代で、はじめて男女一体で出現した神である。二柱は兄と妹の関係だが、夫婦になった(竹田, 2011)。これらの神は、日本書紀の巻一には壠土煮尊：うひぢにのみこと・壠土根尊：うひぢねのみこと、および沙土煮尊：すひぢにのみこと・沙土根尊：すひぢねのみこと、として現れる。この二神の名について、本居宣長は、宇(ウ)は、泥(ウキ：泥の古語)の略、須(ス)は沙(スナ)であるとしている。平田篤胤は、宇は初(ウイ)、須は沙(スナ)であるとしている(藤原, 1991)。いずれも、埴土と砂土を神格化したものである。この頃、すでに埴土と砂土を大きくふたつに区別し、はっきりと認識していたのは、驚くべき観察力である。一方、これらの神は泥や砂をあらわし、土器や煮炊きの神とも考えられている(吉田・古川, 1996)。

これらの神は、熊野那智大社(和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山)・二荒山神社境内十二社(栃木県宇都宮市馬場通り)・物部神社(島根県大田市川合町)・熊野速玉大社(和歌山県新宮市新宮)・宮浦宮(鹿児島県霧島市福山町)などに祀られている。

2) 神生みによる神々

神世七代の伊耶那岐神と伊耶那美神が国生みをおえたのち、神生みをおこなって岩や土にかかわる石土毘古神(いわつちびこのかみ)・石巢比売神(いわすひめのかみ)と、火の神の火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ)が現れた。

(1) 石土毘古神(いわつちびこのかみ)・石巢比売神(いわすひめのかみ)

これらの神は、伊耶那岐神と伊耶那美神が神生みを始めて二、三番目に生んだ神である。両神は一对になっており、家宅六神の一柱で古事記にしか現れない。家宅六神とは、神道における家宅を表し守る六柱の神の総称で、建物の材料や構造を示したものである。家を作る材料になることから神格化されたと考えられている(國學院大學古事記センター, 2019)。

石土毘古神は住居に関する神々として、石巢比売神と共に竪穴住居の床や壁面に必要な岩や土、砂の神格化とする説がある。また、“いわ”は大地に根を生やしたような大きな岩石のことであるから、住居の土台になる岩石と土で、敷地の神格化とする説がある。これらも神生みで誕生した他の神々と同様に、自然に関する神々とする見解もある。その立場から、石土毘古神・石巢比売神を国生みで生まれた島(国土)に大地が形成されることの表象とする説がある(國學院大學古事記センター, 2019)。この意味で、ここでは土神としての扱いはしないことにする。

石土毘古神は、愛媛県西条市の石槌神社の祭神として知られる。西日本の最高峰である秀麗な石槌山(標高1,982m)を御神体としている。古くから石槌山の周辺地域に暮らす人々の生活を守る守護神だった。石土毘古神を祀る神社には、このほかに、石土神社(高知県高知市神田)や谷保天満宮(東京都国立市谷保)などがある。

(2) 火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ)、別名：火之夜芸速男神(ひのやぎはやおのかみ)・火之炫毘古神(ひのかがびこのかみ)

記紀における火の神で、古事記では、上記のように三つの名で表記される。日本書紀では、軻遇突智(かぐつち)・火産靈(ほむすび)と表記される。火之迦具土神は伊邪那美神の最後の子であるが、火の神であるために生まれるときに伊邪那美神の陰部に致命的な大火傷を負わせる。そのとき病床で排便をする。この大便から誕生するのが、波瀨夜須毘古神と波瀨夜須毘売神と呼ばれる土の神である。

3) 伊耶那美神から成った神：波瀨夜須毘古神(はにやすびこのかみ)・波瀨夜須毘売神(はにやすびめのかみ)・波瀨夜須(はにやす)

上で記したように、神世七代の伊耶那美神が火之迦具土神を生み、そのとき陰部が焼けて病床で大便から誕生したのが、この二神である(吉田・松村, 2011)。波瀨夜須は、土の男神である波瀨夜須毘古神と、土の女神である波瀨夜須毘売神を一神として称した場合の呼び名でもある。「ハニ=埴」は粘土を意味するから土の神とされる。同時に、伊耶那美神の尿から生まれた弥都波能売神(みづはのめのかみ)と共に肥料の神や農業の神とされる。波瀨夜須毘売神は埴山姫命(はにやまひめのみこと)と称されることもある。

波瀨夜須毘売神は静岡県島田市大井町の大井神社の祭神として知られる。大井神社は氾濫を繰り返す大井川を祀った神社である。他には埴山姫命として榛名神社(群馬県高崎市榛名山町)で祀られている。

4) 天之狭土神(あめのさづちのかみ)・国之狭土神(くにのさづちのかみ)

神世七代の伊耶那岐神と伊耶那美神が交わって、大山津見神(おおやまつみのかみ)が誕生した。山の神である大山津見神は、野の神である鹿屋野比売神(かやのひめのかみ、別名は野椎神(のづちのかみ))との交わりで、天之狭土神(土の神：山地の狭くなったところの意)と国之狭土神(土の神：山地の狭くなったところの意)が生まれた。

国之狭土神を祀る神社は宇奈岐日女神社(大分県由布市湯布院町)、岡太神社(福井県越前市大滝町)などがある。

5) 大土神(おおつちのかみ)、別名：土之御祖神(つちのみおやのかみ)

伊耶那岐神が御鼻を洗ったときに成ったのは、嵐の神である建速須佐之男命(たけはやすさのうのみこと)である。この神は、神大市比売(かむおおいちひめ)との契りで大年神(おおとしのかみ)を成す。この神と、天地迦流美豆比売(あまちかるみずひめ)とが交わって生まれた神が、大土神である。田地を守護する神とされる。日本書紀には現れない。神宮(伊勢神宮)の摂社に、大土御祖神社がある。また、神宮の外宮に別神である土宮が祀られている。土宮の祭神は、外宮のある山田の原の地主の神である大土乃御祖神(おおつちのみおやのかみ)とされる。

代表的な神社に、豊受大神宮境内の土宮(三重県伊勢

市豊川町)・宇倍神社境内の国府神社(鳥取県鳥取市国府町)・伊奈富神社境内の豊御崎神社(三重県鈴鹿市稲生西)・美保神社境内の宮御前社(愛媛県松江市美保関町)・曾根能夜神社境内の若宮神社(島根県出雲市斐川町)・住吉大社境内の後土社(大阪府大阪市住吉区住吉町)・伏見稲荷大社境内の上ノ社(京都府京都市伏見区深草藪ノ内町)・大和大園魂神社(兵庫県南あわじ市榎列上幡多)・遠賀神社(山形県鶴岡市外内島)・赤城神社(群馬県前橋市富士見町)・途幣姫神社(群馬県大田市長久町)・大國玉神社(三重県松阪市六根町)・畠田神社(三重県多気郡明和町)などがある。

3. 土神を祀る神社の分布

土に関する神々を祀る神社はわが国全般に分布しているが、その分布の特徴について検討した。

宇比地邇神, 須比智邇神, 波邇夜須毘古神, 波邇夜須毘売神, 波邇夜須, 天之狭土神, 国之狭土神, 大土神を土に関する神として検討の対象とした。以上の神々について、国内の78,960社の神社の内容をまとめた神社本庁総合研究所の資料「平成『祭』データ」(神社本庁教学研究所研究室, 1995)から、本殿祀神・主祭神のみを抽出し、合計607社について分析した(表1)。その際、それぞれ関わりが深いと考えられる神々をまとめて群とした。群の番号はそこに分類される神社数の多い順に数字を割り振った。

1群について、波邇夜須毘売神を祀る神社は286社ある。群馬(31社)、福岡(21社)、福島(19社)、茨城(17社)、徳島(13社)、新潟・広島(12社)、三重(11社)、埼玉・岡山・長崎(10社)の順に多く日本全国に分布している。また、波邇夜須毘古神を祀る神社は24社で、波邇夜須毘売神と波邇夜須毘古神を同時に祀る神社は12社ある。このことから、祀る神社の数の違いにより、波邇夜須毘古神は波邇夜須毘売神と対になる神として後に祀られ

た可能性がある。波邇夜須毘売神を祀る神社のうち埴山姫命として祀られている神社は157社あり、内訳として群馬県が23社と一番多かった。さらに詳細にみると、榛名神社系が11社あり、波邇夜須毘売神は埴山姫命としては有力な神社を中心に分布を広げた形跡が見られた(吉岡, 2010)。一方、波邇夜須を祀る神社は129社あり、そのうち100社が福岡県にある。分布が福岡県に集中していたことから、地域的および地勢的な要因が影響していると考えられる。

2群について、宇比地邇神および須比智邇神を祀る神社は、それぞれ99社および71社ある。そのうち69社が両神を共に祀っている。これらの神を祀る神社は、北海道・東北を除く各地域に分布している。とくに奈良(12社)、新潟(8社)、茨城(7社)の各県の順に多い。宇比地邇神, 須比智邇神は同時に祀られていることが多いため、ほぼ同時期に對て祀られてきた神々と考えられる。また、2群では、1群のように有力な神社を中心に分布している様子は見られなかった。

3群について、天之狭土神を祀る神社は6社である。国之狭土神を祀る神社は32社あり、新潟(7社)と奈良(6社)に比較的多く分布している。国之狭土神は天之狭土神を祀る神社よりも多く、日本書紀には天之狭土神に相当する神がないことから、天之狭土神は、「国」に対する「天」として対にするために後に追加されたと考えられる(大野, 1970)。

4群の大土神を祀る神社は43社で、中国, 四国地方、とくに高知(13社)と広島(7社)に多い。

4. ま と め

現在も土壌の神を祀る神社は相当数存在する。しかし、祈年祭や新嘗祭など農業関連の祭りはあるものの、土壌そのものを祀る祭りは残されていないようである。神社に祀られている神々の神名が確定された時期はさまざまであった。しかし、その神名が確定される経緯を考えると、その地域の土壌に対する信仰と環境が深く関わっている。

日本人は古代から、土壌の持つさまざまな側面をそれぞれ神として敬ってきたことが確認された。土および土壌の神の多様性は、日本の土壌の多様性と関連がある。しかし、その歴史の多くは忘れ去られ現在に至っている。それが、農業や自然環境への関心の低さの一因となっている可能性が高い。先人の土壌に対する想いを学び、土壌やそれを取り巻く環境に対する接し方を新たにすることが、現代において必要と考える。

付 記：本報告の一部は、2014年度日本土壤肥科学会東京大会および2015年度日本土壤肥科学会京都大会において発表した。

文 献

藤原彰夫 1991. 古代文化, 博友社, 東京.

表1 土神を祀る神社数

群	土神名	左記の土神が主祭神として祀られている神社数/ 土神が主祭神として祀られている神社総数
1	波邇夜須毘売神 (上記のうち埴山姫命として祀る神社は157社/286社)	286社/607社
	波邇夜須毘古神	24社/607社
	波邇夜須 (波邇夜須毘売神と波邇夜須毘古神を同時に祀る神社は12社)	129社/607社
2	宇比地邇神	99社/607社
	須比智邇神 (宇比地邇神と須比智邇神を同時に祀る神社は69社)	71社/607社
3	天之狭土神	6社/607社
	国之狭土神 (天之狭土神と国之狭土神を同時に祀る神社は2社)	32社/607社
4	大土神	43社/607社

- 神社本庁教学研究所研究室編 1995. 平成「祭」データ.
國學院大學古事記学センター 2019. 神名データベース. [http://
kojiki.kokugakuin.ac.jp/shinmei/](http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/shinmei/) (accessed 2020-1-10)
- 陽 捷行 2017. 万葉集に詠まれた土壌—「あおによし」「はに」「に
ふ」などの由来と意味—. 土肥誌, **88**, 568-573.
- 陽 捷行 2019. 風土記が語る「地味肥瘦」と現在の土壌分類との
対比—播磨国を中心に—出雲・常陸・豊後・肥前国について—.
土肥誌, **90**, 279-286.
- 大野 晋 1970. 日本神話, p. 116-127. 有精堂, 東京.
竹田恒泰 2011. 現代語古事記, 学研.
上田正昭編 1975. 風土記, 社会思想社, 東京.
吉田敦彦・古川のり子 1996. 日本の神話伝説, 青土社.
吉田敦彦・松村一男 2011. アジア女神大全. p. 127. 青土社.
吉岡亮太 2010. 「平成『祭』データ」の計量分析に基づく神社分布
パターンの地域的特質. 日本地理学会発表要旨集, **77**, 213.